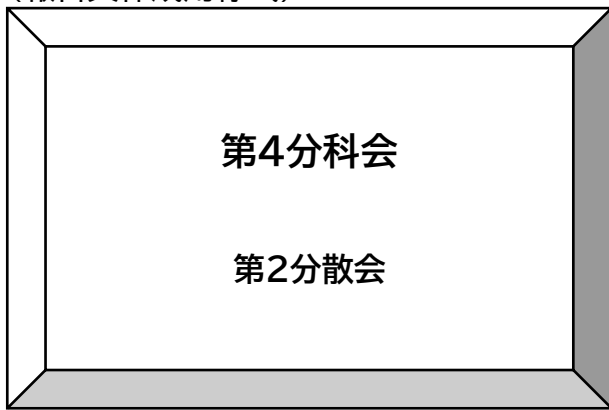




I はじめに

分散会の基調提案では、協力者から解放子ども会に関わる実践を含め、報告集 P60 の識字学級、夜間中学及び解放子ども会活動に関わる部分を提案するとともに、討議の柱については、報告集 p 65 の「部落問題をはじめとするさまざまな人権問題の解決をめざすまちづくりをどう進めていくか」というテーマで、提起されている7つの討議の柱を確認し、討議・交流を進めた。

II 報告及び質疑討論の概要

ー報告1ー⑥

「レイちゃん、はなかつぱのパンツのときわらっていたね」(熊本県人教)

ー主な質疑と意見ー

愛媛 11月に「お母さんがいい」と言っているジンくんの思いがわかればお話いただきたい。

報告者 この頃は、ジンくんの家は仕事で忙しく、母はジンくんにも関わりたいと思っているが、お店の方もしていかないといけない。だから、朝からジンくんが大泣きして、預けられ、「いつてきます」と言われて行かれる。ジンくんは、母が忙しいのを感じていて、何日間かはずっと泣いて、イライラしたり、友だちに当たったりすることが多々あった。

熊本 「お集まりだから座らなん、前を向かなん、ちゃんとさせなんと思う気持ちもある私」とあるが、今の保育に変わったきっかけを教えてください。

報告者 「何でお集まりのときにも座っていない」と、子どもたちは疑問に思ったことを聞いてくる。「レイちゃんは、ホールで遊んでいるよ。」と言葉がけをしてきた。だから、ジンくんが呼びに行くと言ったとき、私は「行かなくていい」と言った言葉に取り返しがつかないことを言ってしまった。子どもだから言っていってことじゃないとその時思った。私はレイちゃんに自分のクラスが楽しいと思ってもらえるようにしたいし、ジンくんや周りの子どもたちと繋がたいって思っていたのに、こうやって行事や時間に振り回されている自分はどうなのかって考えさせられたのがきっかけであった。

熊本 「同和保育所が建った意味をもう一度振り返り、」とあるが、同和保育所が、ムラの父ちゃん、母

ちゃんのどんな思いで建てられたのか、そのスタートを明らかにしてほしい。そして、同和保育所でどんな保育を大事にしているのか、受け継いできているのか明らかにしてほしい。

報告者 部落差別の結果として、環境が劣悪であったり、親の教育の機会が保障されなかったり、親の仕事が不安定であるから、部落差別こそが、子どもに悪影響を与えてきた。その中で、部落差別に課題があると訴えたムラの人たちが、立ち上がって建てられたのが同和保育所である。1982 年の 4 月に同和保育所が建てられた。その中で、どうしてムラの中に保育園を建てるのか、周りの人たちから批判されたと聞いている。最初はムラの子たちだけしかいなかったけど、徐々に障がいのある子どもたちや、また保育内容がいいと広がっていったことを聞いている。建てられた当初、保育園の先生たちも、たくさん法などを勉強したり、福岡の同和保育所に行かれたり勉強をされたと聞いている。その中で、つまきたいそうや、体験活動が大事だということで、この同和保育所も取り入れられたと聞いている。

熊本 ムラの願いがあって建てられて、大事なことをずっと保育士に受け継がれてきてるはず。時代は変わってもどうなのかを明らかにしてほしい。

熊本 最初に私が異動して聞いたのは、「部落差別で自分たちが流した涙を、次の子どもたちには流させたくない、それは教育でしか変えられない。就学前は保育の場である。そこで、保育園でもしっかりと差別に負けない子どもを育ててほしい」という願いがあって建てられた。保育の中身としては、つまきたいそうであったり、体験活動であったり、生活画である。全ての保育の中には、子どもたち同士が、お互いを認め合って、お互いのことを知ることで、なかまをつくっていく。そんな保育の中身を今、実践してきている。

高知 ジンくんは何でこういう風な行動をしていったのかということを知る範囲で教えていただきたい。そして、それを子どもたちにどうやって返していくのか、レイちゃんの行動が周りの子どもたちにとっての不可思議な状況で、今ここにいない、いてほしいのに何でレイちゃんいなくなったのかというのは、周りの子どもたちにもレイちゃんの思いをどうやって伝えてきたのかということも、もしあれば教えていただきたい。

報告者 レイちゃんはこの頃は全くお話ができなかった。少しずつ言葉を獲得していくが、レイちゃんが大泣きしたり何かしていても、最初、私もわからなくて、まずは私が知るしかないと思って、レイちゃんの態度、表情、姿など、感じたことは書いてきた。この線路で遊んでいた時に、ジンくんが「なんでダメ。」と言っていたが、レイちゃんの顔を見たら、レイちゃんは、その時は何回もジンくんの手を振り払って、何回も触っていたので、もしかしたら一緒にジンくんと遊びたいのかなと思って、ジンくんに対して、そういう言葉がけをした。すると、ジンくん

は「そっか、レイちゃん遊びたいのか。」と言って、ジンくんがその線路を触らせてあげると、しばらく一緒にいたんです。また、「ジンくんがなんで泣いてきたか、教えるね」と言って、子どもたちには私から、「ジンくん、お母さんの仕事が朝早く、夜も遅いからお母さんと一緒にいたいんだって。だから泣いてきたんだよ。」と言って、子どもたちには、ジンくんの思いを伝えるようにしてきた。

協力者(愛媛) 「知るしかない」という言葉が出た。言葉でまだ伝えることができない。やはり表情であったり、態度であったり、大事なものはそれを具体的に見れるかだと思う。漠然と見逃さない。具体的に、あの時と今と言ってること一緒だけど、表情違うよねとか、それを詳しく知っていく、知ったことで今度認めていくことが大事と感じた。

高知 この子どもたちの就学先の小学校の職員の方、来られてたらこの保育所で育ててきた子どもたちへの人権教育をどう受け継いで、どうつなげていってるのかをお聞きしたい。

奈良 保育の集団としてどういう風にこの実践をされるにあたり、どんな形で話し合いをされてきたのかを教えてください。村田さんだけではなく、他の先生方の集団がどういう方向で保育にあたったのかということも教えてください。

報告者 園内では、まず5月に家庭訪問があるので、家庭訪問に行った後に、お家の人たちの思いや、子どもの様子を園でも共有をする。その後、6月ぐらいに課題を、誰を中心に据えて保育をしていくのかを書いて、園内研修で論議をしていく。そして、その都度運動会や、発表会などの様子を文章にまとめて、園では論議をしてきた。

—報告2—⑧

**二人の思いは、すべての人の想い(和歌山県人教)
—主な質疑と意見—**

高知 自主夜間中学もずっと関わってこられて、公立の夜間中学が25年、26年にそれぞれできるとのことだが、自主夜間中学も並行して続けていけるのか。

報告者 自主夜間中学は続けていく。来年4月に市立、公立の夜間中学校は開校に向けて進むと同時に、今年の4月からそこにもう一つ肩書渡している。「和歌山自主夜間中学校」、これを立ち上げた。

奈良 小学生、中学生の中にも不登校の子どもたちがたくさんいる。不登校についてなんとかしていきたいという思いがある。いろんな千差万別の事情を持っている子どもたちがいる。それを夜間中学の方でどういう風に受け止めをされているのか、教えてください。

報告者 学校現場の思いは、不登校の子どもたちを担当が、または学校の職員がなんとか関わって、なんとか1日でも学校へ誘うという努力はするが、限界がある。その限界って一体何かと言ったら、その子によって不登校になった理由が全然違うということ。この子にはこんな理由がある、この子はま

だ全然理由がわからない、不明である。そこで、私がさっき言わせてもらった、夜間中学校っていうのは、基本的に、生徒の生活背景や、もし外国にルーツを持つ方であつたら、なぜ日本にいるのか、そこまでの生い立ちが大事であつたり、また、実習の場合は、いろんなコミュニケーションができる、いきなり授業は始まらない。だから、その人とじっくり会話をする中で、じっくりその人の生活背景、「どこに住んでる」、「何を食べてる」などを聞き出しながら授業を組み立てていけるというスタイルなので、そのことが一番、今大事になってきているのではないか。

協力者(三重) 吉本さんの報告が、1本目の村田さんの「同和保育所が立った意味をもう一度振り返り、立ち回らなくてははいけない」というこの言葉と、「今一度考え直す時期が来ているように思う」というところが繋がっていると私は解釈をしている。その「なくてはならないもの」というのが、識字学級、夜間中学校、文字を知って学ぶこと、これが例えば差別への怒りや悔しさ、憤りを、消化していき、自分を取り戻していく場所だからこそ「なくてはならないもの」であり、それを語っていける場所だからこそ「なくてはならないもの」だと思っている。でも、吉本さんの言葉にあったように、本来、貧困や差別さえなかったらこれは必要ないものというこの辺りが、実は識字学級や夜間中学校だけではなく、私たちの普段の全ての活動に通じていくものだと考えている。

高知 何を一番大事にしたいのかなと思うと、そこに集う心意気であつたり、そこに思いを馳せられる自分であるかないかとか、そういうことじゃないかと思う。その1本目の保育所の発表もそうであつたと思うが、差別の現実、不利益が生じて、いろんな状況の中でしんどい思いをさせられてきた人たち、子どもたちとかいろんな状況の中で、そこで自分が気づかされて、思いを馳せることができる人に私はなりたいと思った。

報告者 私も部落出身であり、教師である。そんな中で子ども会でも育ててきた。解放運動もやってきた。時には支部長という大役を背負ってやってきたこともあり、ムラ中をまとめてあげてきたこともあった。でも、このお母ちゃんが語られたことは、皆さんに届いたと思う。

香川 そもそも義務教育を受けることができなかったのは、仕事が忙しいとかいろんな事情がある。夜間中学の支援体制はどうなっているのか。

報告者 その人が、今仕事が忙しかつたら、それこそ、その仕事が一段落する、ある意味定年ですね。はい、定年迎えたその年からでも来ていいとなっているし、お金は心配いらない。ただ、交通費はかかるけれども、義務教育なので無償というのは聞いている。それは和歌山市の公立の夜間中学校も一緒である。ただ、通学に2時間も3時間もかけることはできない。だから、県下に5つや6つ、7つ、夜間中学校が必要だという話をさせてもらった。

香川 今できた夜間中学校は、私の考えているものは違っているとされているわけだが、そもそも、どんな学校をつくってほしかったのか。

報告者 私の理想とする夜間中学校は、生徒に寄り添うような、生徒を一番に考えてくれるような夜間中学校になってほしいというのが一番である。例えば、市立校の定時制と時間割りを一緒にしている。つまり、給食はない。でも、給食を食べる時間は保証するよということで、定時制の時間に合わせているので、16、17 歳ぐらいの定時制の方の食べるスピードと、60、70、80歳ぐらいの人の食べるスピードがちがうのに、同じ時間帯である。「たったの10分で、補食を食べてください。その間に次の授業の準備をしてください。」という時間設定である。それは、若い子であれば可能だが、お年寄りにそれを強いるということは、人権侵害ではないかというのを教育委員会に伝えた。

——一日目の総括討論——

協力者(熊本) 総括討論の前に、一つ村田さんに話をいただきたいのが、このレポートをつくっていく中で、ジンくんを中心に据えた保育というところがあったと思うが、そこには村田さんの思いがあったと思うので、最初に聞かせていただきたい。

報告者 何で、私がジンくんにこだわっているのか、ジンくんがレイちゃんに関わる姿も大事にしたいと自分の中で思っている。ジンくんはムラの子である。ジンくんが、大きくなって差別を受けたりするかはわからないが、自分の命を絶ってほしくないし、良いことがあっても友達に話をしてほしいと思って、ジンくんにこだわってきた。子どもたちに経験させる中で、自分たちで考え合って、このような保育を積み重ねていくしかないと思って、ジンくんとレイちゃんを繋げて保育をしてきた。ジンくんのお父さんとは、小さい頃から解放子ども会で一緒に勉強してきた一人です。お父さんとは、小さい頃の話をして、お母さんとも部落問題について話をし、お母さんは嫁いでこられたので、部落差別は、昔にあったことで、今はないだろうと思っておられた。曾じいちゃんが支部長をされていたので、話を聞く中で、今は差別はあるんだとお母さんが知ったということを話された。だから同和保育園の保育を大事にしてほしい。ジン君のお父さん、お母さんそしてジンくんと関わったりする中で、保育内容について、言葉がけだったり、自分がどのように接していくかは、保育士は専門職なので考えていかないとはいけないし、友だち同士を繋ぎ合っていくしかない、今は思う。

協力者(熊本) 話を聞くと、部落差別の現実があるというこの社会の中で、部落差別に負けない力をつけていきたいという村田さんの思いだからこそ、ジンくんを取り巻く周りの子たちとは、差別をなくすなかまとして繋げていきたい、レイちゃんをはじめとする周りの子たちを繋げていきたいという思いがあった。また、村田さん自身が、保育園の

中で働かれる中での自身の変わり目を伝えられた。ジンくんやレイくんに出会ったことで、やはり、同和保育をやっていききたいという思いがあったと思っている。

熊本 この同和保育園、山都みらい保育園での取組では、ジンくんを中心に据えて、ジンくんと一緒に差別をなくす保育をしているというのがいいなと思った。村田先生にとってはいつも子どもが中心である。本当に子どもをしっかりみている。何で泣いているのか。何が楽しいって思うのか。常に子どもに問いかけ、そして自分自身にも問いかけている村田先生である。村田先生が発信してこられることは、子どもを一番に考えていることなので、職員もみんな納得がいくし、またそうあるべきだという風に思われる。一緒に差別なくす集団として関わっていききたいと思っている。

愛媛 同和保育の中で、このジンくんの姿が、私は同和保育の本質だと思っている。ジンくんから学ぶことはたくさんある。それをもっと具体的に自分のものにしていくことが、これから大切なことだと思っている。先生がジンくんと一緒に差別と闘っていく、その姿を一番大事にしていきたいと思う。ジンくんはレイちゃんに対してすごく対等に接しているし、それもレイちゃんは肌で感じていると思う。そういう意味で、ジンくんとその関係が周りの子どもたちにも広がっていくことを願っている

高知 自分で気づいたところや子どもたちに対しての向き合い方が変わっていったという状況を、同和保育をすすめていく中で、先輩やジンくんのお母さんとかの話を聞いたことを、どのように後輩や子どもたちに関わってる保育士さんたちに継承していくのかを知りたい。

報告者 保育園の職員とは、園内研修をして、3年前にレポートの会議をしている。ジンくんのお母さんたちの思いは、大事なところだけは先生たちにもわかってほしいので、それは伝えてきた。また、クラスには何も言葉が出ないお子さんが一人いて、私はただ遊んでるって思っていたけど、その子の意思に関係なく、周りの子たちがしてあげてたり、その中にムラの子もいた。それを見た時にショックで、私は子どもたちの姿を見てなかったんだと思った。そういう子どもたちの姿を見すごしていたら、差別もなくならないし、子どもたちにも「いじめをしないで」、「嫌なことをしないで」と言えない。このレポートを書きながら、自分はどうかなのかというのを、このムラや、ジンくんに気づかせてもらった。

高知 自分が保育していた時はこういう思いで保育していたということを、他の職員だったり、小学校の先生にも、自分の思いで保育をしたということ伝えられているか。

報告者 小学校と年長の担任がレポートで保育内容引継ぐ。ここまで育てたので、その姿は崩さないように小学校でも繋げてほしいと3月か4月に行っている。異動があるので、残った職員にもレポートを通して伝えている。

高知 書類上のことではなく、村田さん自身が学んだことも、どう伝えているのかということで、私は、保育の基本は、人権教育、人権保育だと思っている。その人権保育に対して、村田さんや保育所の方たちは、人権保育をどういう風に捉えているのか。この先、同和保育所の名前がなくなったから、じゃあどうする。同和保育所で人権保育を大事にしてきたその発信は、人権保育、同和保育所に勤めている村田さんがそれを発信しないといけない。人権保育同和保育所がいいというのであれば、再園活動をどこでもしていると思う。そこに思いを馳せる保育士であったり職員間、保護者との連携が、そこにどれだけ、その子を守るために、その子を大事にするために、繋がっていくためにどうやっていくか、思いがあるかないかだと思う。人権保育を大事にするということは、人権保育を大事にしていきたい人が声を上げないと、行政は動かない。ぜひ、人権教育、人権保育を広めていく、発信源になってもらい、その思いを伝えていってもらいたい。村田さんたちのこれからの方向性じゃないかなと思う。

報告者 発信源にならないといけないですね。でも、迷う。先生たちに、自分はおかしいと思っていても、おかしいって言えない自分もいる。自分を責めて、自分の保育が全て正しいとは思っていないので、いろいろ指摘されたり、意見をもらった方が自分は勉強になると思っている。ジンくんのお父さんやお母さんには、「今日の全人教大会は頑張ってこい」と言われて、やっぱり発信していかないといけないなと思っている自分がいるのが現状である。

熊本 とても厳しいかなと思った。発信していくのは関わっているムラだろうと思う。私は、差別する側の人間がしていかないといけないんじゃないかなと思う。ムラの人間がムラに何をしていくのか、ムラ外の人がムラで学んだ中で、自分たちが広げていかないといけないと私は思っている。支部では、保育園と最初の4月の時点で話し合いをする。解放同盟と保育園の先生たちとで、同和保育所は何で建てられたのか、どんな目的にするのか、どんな子どもを育てるのか、話し合いを行う。そして、そのこと押さえた中で、本町には保育園が5つあり、集まって先生たちと現地学習会を行う。そういう中で少しずつ広げていき、その中で村田先生も発言をしていくという形を取りながら、1年間取り組んでいる。4月から小学校に入学させる時点で、レポートの交流会をする。その中には支部も解放同盟も入る。また、保育園から必ず授業参観、小学校である活動にはどんどん参加してほしいと、自分たちが育てた子どもたちを学校に見に行ってもらいたいと伝えている。それで、学校の先生がどんな取り組みされているのか、自分たちが伝えたいうで、きちんと育ててもらっているのか、そういうところを確認しに行ってもらいたい。こういう取組を1年間やっている状況である。

協力者(熊本) 今、村田さんの話の中で、考えなければいけないと思うところが、「差別は、差別をす

る側の問題である」ということがあった。自分自身の在り様が一体どうなのかということが問われていると思う。我々が保育園であったり、学校であったり、行政であったり、それぞれがその職場の中で働いているが、差別をする側の問題として、どう向き合っているのかが問われていると思う。

愛媛 隣保館を建設する時に、周囲の人は反対をされた。「誰もプラスになることはないと言っているのに、どうして隣保館を建てるんだ。」というような猛反対があった中に隣保館を建てて、その当時の隣保館は100パーセント同和地区の子どもであった。建って55年になるが、毎週、小学校、中学校の子どもたちが、いろいろな思いを持って学習をやってきているが、その中で今は99.9パーセントは、同和地区の子どもではない。ということは、周囲の人たちが、お父さん、お母さん、おじいちゃん、おばあちゃんがそこに行って勉強してくるんだと理解がある、そういう社会づくりができています。

高知 保育士や行政、教師などその立場の中で、「差別はいかん」、「子どもに対して、差別に負けるな」ということを言われるが、自分自身がその状況、立場になった時に、どういう行動が取れるかというのを皆さんに考えてもらいたい。

熊本 現在、ジンちゃんとレイちゃんの担任をさせていただいている。レイちゃんは野菜をほとんど食べずに残すことが多かったが、ジンくんが「トマトなら食べます。」と言ったことが僕の保育の取り組みのスタートであった。その事実を見て、その姿を大切にしたいという思いで取り組んだ。レイちゃんはクッキングが大好きで、クッキングもたくさん保育の中に取り入れてきた。今の様子は、部屋から抜け出したりすることはあるが、ジンくんをはじめ、子どもたちが迎えに行くと、職員がいなくても、部屋で遊んだりしている姿がある。レイちゃんは来年4月から小学校に入学する。まだ4か月あるので、責任をもって取り組んでいきたい。

熊本 私が識字と出会ったのは1997年である。でも楽しみな時間は、お茶を飲む時間であった。もちろん識字の講師の人柄もあるのだが、ばあちゃんたちが、人生の1コマ1コマ、あの時のこと、辛かったのも、悔しかったのもあると思うけど、笑いを入れながら話をし、そんな時間を過ごさせてもらいながら、今、天国にいるばあちゃんがこんなことを話した。「先生、子どもをかわいがってな」ということを。そのばあちゃんの生きてきたいろんなものがある。今日、報告を聞きながら、改めて話してもらえる関係性でありたいなと思った。そして、今日吉本さんの話が羨ましいなと思ったことが、話をしてもらえることが、そんな関係は簡単にできない。自分の人生のきつかったいろんな部分を相手に伝えていくというのは、その関係性、そこにどんなものが流れているのかなと言った時に、あったかいいものが流れているが、その関係を今できる部分も含めて大事にしていきたい。

熊本 一番発信しなければいけない立場にいるの

は自分かなと思って聞いていた。私自身、以前は同和保育という形ではなく、本当に集団で定数の決まった子どもたちを、集団で動かすような保育をしてきた。だから、いきなり同和保育園に配属になった時に、自分自身がもうぐちゃぐちゃになってわからなくなってしまう。そんな時、同僚の先生が本当に丁寧に話をしてくれた。支部長も自分のことも話してくださったし、そういうのが積み重なって、自分のプラスの捉え方はできてきたと思う。部落差別は差別される子どもたちの問題ではなく、周りのする側の問題だと思う。でも、それに打ち勝っていく子どもを育てなければならないと思う。だから、どんな実践をするのか、子どもたちに差別はダメよとか、いじめはダメよとかではなく、対等にその子の意見を聞ける子どもたち、その子の姿を見れる子どもたちを育てなければいけないと思う。

愛媛 もう随分前だが、綴り方教育でやっていた。報告の中に、「読み書きができないので、手紙を全て捨てた。そして、情けなくて、生きてる価値がないと感じたことから出るんだ。」とあった。そういう思いというのは、綴り方教育の中で、子どもたちが少しずつ自分の思い、経験、体験を、また差別性みたいなものもあったと思うが、それを少しずつ明らかにしていく。そしてそれを私たちが感じていく。その取組は、この報告と同じかなと私は思った。

大分 吉本さんの報告の中で、夜間中学校がその不登校の子どもたちの受け皿になっているというところで、いろんな道があった方がいいなと思いながらも教員をしていたので、今の学校が子どもたちにとって居場所になっていない、行きづらい場所になっているということで、とても危惧している。だから、そういう方向に進まないように、大分県でも夜間中学の動きがあるが、残していかないといけないうんだと強く感じた。

——一日目のまとめ——

協力者(愛媛) 吉本さんの言葉に、「学校に子どもが合わせるのではなく、子どもに学校が合わせるんだ」といったものがあった。その子に合わせようと考え方を持てば、また、みんながそのことを考えることで、一人ひとりの背景を考えていく、それに寄り添うことになるのではないかなと思う。今回のテーマとしては、「つなぐ、つながる」ではないかと協力者が話をしたが、「つなぐ」とは何か、「つながる」とは何かと思ったときに、それは「思い」だろうなと思った。一人ひとりの強い思いをつなげていくことが大事であると感じた。そして「つながる」とは、「思い」を踏まえて、学び続けることも「つながる」とことだと思う。さらに、思いをつなげていくのは、学び続けていくことであり、学びの環境を整えていくことでもある。思いを同じにする人が集まることで、安心して発信できると思う。この安心の場こそが、それぞれの居場所だと思う。安心の居場所をつなげていく、これもまた大事なつながりになるのではないかな。「つなぐ」とは、「思い」とともに「つなぐ場

をつくること」であると思う。「自分でやっていけることをやっていきたい。」これが基本である。自分一人ですることとは何か、その足元をしっかりとつけていく、そこで思いをつなげていくことが大事である。

—報告3—⑤

識字学級と共に40年(熊本県人教)

—主な質疑と意見—

熊本 1点目は、「V 他県の識字学級生との出会い」の1行目、解放新聞の文芸欄の一つを読んだら大変感動されたということだが、どんな内容だったのか。齋藤さんは、最初、識字学級でお互い知ってもらうために私のことを話そうと思い、話したということであるが、どんな話をされたのか。

報告者 一つ目の質問について、解放新聞の文芸欄にある全国から寄せられた体験とかをよく読み聞かせて使っていた。その方も学校へ行けてなくて、文字が書けないから識字学級で文字を習っているという内容で、その苦労話、私どもの学級に通っていらっしゃる人たちと重ね合わせる部分が多かった。二つ目は、一人のお母さんとは、私と一对一の勉強ですから、距離を縮めるためには、私のことをまず知ってもらわないといけない、どんな人だろうと不安を持っていたは、学習にならないから、私の方から先に、私の家族のこと、自分の生い立ちのこと、それから、趣味のこと、そういうことを話した。そうしたら、こちらから聞くまでもなく、ご自分の方から、私は字の練習も、字の書き方も、もちろん習いたいんだが、私の気持ちを聞いてくださる方がほしかったということだった。

熊本 補足をさせてもらうと、この識字のスタートは、当時の隣保館の前の一人のおばあちゃんの声が届いて、その声が行政、当時の社会教育課の方に届く。だから、識字学級をつくるということで、この識字学級がスタートしている。だから、スタートの部分において識字学級という解放運動の中でつくられたものとは少し違ってくる。

大分 私が疑問に思ったのは、「そぎゃん字ば書きよっとね」と言った方たちはどういう思いで言われたのかを教えてください。

報告者 言った方、言われた方は、もともとお互いに仲がよかった。文字に関しては、いつもは見せあったりしないのに、識字学級で初めて「あなたはそぎゃん字ば書きよっとね」と言われて、ショックを受けられて、「もう私は、識字学級に行くのはやめた」と聞いた。

大分 言った方は識字生の方ではなかったのか、それとも同じ識字生の方ではあったのか。

報告者 言われた方も識字学級に2年目から入ってこられた方である。たまたま隣のお友だちがちょっと学校へ通っていて、文字をうまくかけてる方だったのかもしれない。

熊本 私が、識字で出会ったご夫婦がいて、今も、滑らかに書かれるわけではないが、一生懸命識字

で勉強をされて、センターの発表会に作品が展示された。前からきた同じ地域の方が、「ほんなこて、あんたが書いたつな。」と言われた時に、その方が、「ニコッ」とされて頷いておられた。齋藤先生の取組の中で、識字生の方が自分の思いを、解放新聞の中にいろんな短歌があるのを見て、私たちも書いてみましょうということで、作られた中の一つで、その男性の方が書かれた俳句が、「震えてる、文字を書く手も 震えてる」というのを書いている。一つ一つカルタには、その方の人生というか、生き様が見えてこっちが学ばされる。

熊本 私もフィリピンからきた。日本人と結婚してここで暮らしている。私は最初から「話せない、読めない、書けない」で来た。そして、齋藤先生と出会って、あいうえおから平仮名を勉強した。そして最初に名前を書けるように勉強しました。何回も練習して、次は住所。私は住所を書けるようになって嬉しかった。私の最初のなかまは、みんなばあちゃんたちであった。その時は、私はまだ熊本弁もわからない。みんな方言で話をするから、私は何言ってるかわからなかった。そして、みんなと一緒に勉強した。漢字は最初難しかった。先生のおかげで漢字も、私は書けるようになった。運転免許のことについて、私は最初は国際免許持っていたが、法律変わり、日本の免許を取らなければならなくなった。ちょうどその時、英語での受験ができるようになった。私は一番最初の英語での受験者となり合格できたから本当によかった。私は日本に来て、それから日本語を覚えた。皆さんのおかげ。齋藤先生と出会ってとても良かった。

協力者(熊本) 話ができるようになった。文字を獲得された。その上で運転免許証を取得することができた。ただ、齋藤さん自身がそうなるまでの過程の中でいろんな動きがこの中には凝縮されているのかなと思う。そういったところを大事にしなければいけないところがあるのかと思う。

大阪 まず一人のお母さんの叫びが寄せられて、そこから、その叫びが行政を動かした、そのお母さんが「今から勉強したいんです。」という、すごく勇気のある一言ではないかと思っている。そうやって行動して、齋藤さんが「勉強に行きたくない」と言われたから役場に行って、「2 クラスに分けてほしい」と言った行動、現状を変えるために一歩踏み出すというのは、差別をなくしていく上でも非常に大事な要素になってくると思いながら聞かせてもらっていた。そこで、行動していく上で、活動の過程であったり、困難であったことを教えていただきたい。もう一つ、識字学級内で他府県にわたって訪問することがすごいと思っていて、その交流とはどんなことをされたのかを教えていただきたい。

報告者 最初の質問ですが、お母さん一人の勇気があったから始まった識字学級であった。そのお母さんは、しばらく子どもの成長を見ながら学校へやる、成人して結婚をさせる、そういう過程を踏みながら、大事なことは、文字を覚えて、子どもに肩

身の狭い思いをさせたくない、お嫁先の両親やお子さん方に季節の挨拶状を書いたり、何か贈り物をいただいた時にはお礼状を書くとか、そういう今まで経験がなかったお母さんだったから、とにかく娘を思う親心というか、娘に肩身の狭い思いをさせたくないという一心で文字を書かれていた。2 点目の他県の方々との交流は、行政の支えがあって、全同教にも参加させていただいて、他の県の識字学級はどういうやり方をしているのか、それが目的で参加させていただいていた。直接お話を伺うと、「識字学級というのは、文字を学ぶだけではない、聞くだけでもない、覚えるだけでもない、とにかく心の交流が一番ですよ」という貴重な言葉をいただいた。他県の方々の言葉というのは大変勉強になった。

熊本 少し補足をさせてもらおうと、識字生が県外の研修会に行ってるのかというところで、全同教が別府であるときに、ばあちゃんたちを連れていけないだろうかとということで、行政と相談した。当時の課長が一生懸命考えてくれて、予算もすぐつくわけではないから、1 年半から 2 年かかった。そして、最初是一緒に行政のワゴンで行くことができた。だから、識字学級の取組に、行政が予算措置をしてくれることはありがたいと思う。

奈良 どうしても中学校の現場の中で、識字との出会いをさせたいという思いの中で、学校教育において識字が本当に必要なのかということで、いろんな反対もあったが、やりきった。中学校 3 年生にとっては、進路の文字を奪われる、進路のための知識としての文字を知っていくということは、みんなわかっている。ただ、識字においての文字の奪い返しというのは、なかなか欠落してるものがあつた。文字の重みも含めて、生活も、労働も、全部を含めて、やはり将来にわたって自分の進路を考えてほしいということで、話をさせていただいた。本当に良かったと思った。

和歌山 齋藤先生とは 2009 年から一緒にさせていただいているが、それ以前のうちの識字生に関わっていたが、識字生の伝統とも言える発表会もそこからお声かけいただいて、ぜひ 1 回熊本の方行ってみたいなということで、識字生を連れていった。県外の識字生との交流というのがなかったので、初めての経験で、難しい話をするのではなく、日常会話で、料理などそういう話とか繋がりができて、齋藤先生は、うちの識字生が全同教で報告する度に来てくださってお声がけいただいている。こちらの識字学級も、一緒に行った方々で亡くなられた方もいるし、高齢でなかなか外に出れないということもあって、識字学級があるが、開店休業中というような状況になっている。ただ、識字の火は消したらあかんということで、まだまだ掘り起こせていない部分というのものもある。

—報告4—⑦

寝た子を起こしたい(高知県人教)

－主な質疑と意見－

愛媛 みんな同じような年代で、同じようなことを経験して今ここにいると思う。その些細なことを相談したり、意見を共有したりできるような若者だけの集いなどあったらいいなと思って話を聞いたが、報告者はこのことについてはどう思われますか。

報告者 僕自身は相談できる相手が母であったり、解放子ども会の時にお世話になっていた指導者の方がいるので、別に同年代にこだわる必要はないのかと思う。

高知 例えば部落出身の方で、相談ができる、話し合えるような場所があればいいとおっしゃっていたけど、そこに、自分たちのように差別をしてしまう、出身ではない立場の人が行って学ぶということに関しては、報告者自身は、今まで差別を経験された方というのはどう思うのか。

報告者 僕自身の考えとしては、最近よく聞く話で、差別される側ばかりが勉強してもいけないような話をよく耳にすることがある。差別をしてきた側の人たちの方が学習は必要だと思うので、機会があれば参加してもらいたい。

愛媛 差別された方々が、自分を責めるような社会になっているのではないかということが問題であって、先ほど、差別をする側、される側、もしくは当事者というような言葉が先ほどから出ているが、それは他人事ではないかと感じた。みんなが当事者である。部落差別の当事者、女性差別の当事者、何かの当事者に必ずみんながなっているということを自分自身が感じた時に、そういう表現はなくなっていくのではないかと思う。される側、する側という、学ぶという立場ではなくて、全員が学んでいくということを、会場のお話を聞きながら違和感を感じていて、報告者が本当に伝えたかったことはそういうことじゃないのかと私は感じた。

熊本 その高校の学校内での差別の現状や、人権同和教育のホームルームや、研修があったと思うが、中身は、どんな感じであったか。

報告者 高校の時は、自分の記憶の中では、人権学習は、障がい者や高齢者に対しての話があったと思う。これは高校3年生の時だが、1年、2年とそこで生活していて、その高校の中で、差別というものの自体を聞いたりしているという状況を目の当たりにしたことがなかった。その高校がある校区内に、まず部落があるのかなというところを知りたい。高校自体の取組は、そこまで部落差別に対してはなかった。

大阪 この大会で勉強になったのは、差別する側の問題なんだということ。全員にその可能性があるし、自分の心の中の差別性に気付いていけないといけない、そんな場をたくさん設けないといけないというのが勉強になっている。だから、全員のことを当事者っていうのは、それぞれマイノリティの部分があり、自分の中でもいろんな立場があるというのは、理解しておかなければならないと思ったのと、本当に言えない理由があるということで、理由な

くてそんな明確なものじゃなくても、結局自分が言いたいかどうかだと思った。報告者は言いたかった。それを担任に訴えたけど、言いたかったっていうのを逃げてもいいんだっていうのは、当事者の中には言いたくない人もいる。だから、そこは部落の中でも一括りにされたいけないと思うし、いろんな当事者がいる。また、いろんな当事者にいろんな人が出会っていかないと、そういうのは分かっているのかかなと思ったので、そこは当事者によっても気持ちが違うんだというのは改めて勉強になった。最後に、差別を苦に自ら命を絶たないようにと、結局最後はここかなと思っている。命あってこそ人権学習であると思うし、命を守るための学習でなければいけないと思った。

大阪 石井さんが今まで生きてくる中で、励みになった、力になった、そういうエピソードがあったら教えてほしい。

報告者 小学校、中学校と、私の住む町は結構、人権学習に力を入れているので、自分たちが中学校、小学校の時は、人権学習をしっかりと取り組んでいるので、同級生たちはある程度理解はあるのかなという状況である。相談というか、話してそういうことがあるよという共有ぐらいはする。

熊本 私、この一言「隠せ」が、ずっと気になっていた。ぜひ聞きたいのは、石井さん自身が、自分の思いを同級生に伝えたい。生い立ちを伝えたい。あなたにとって、お母さんもおられるけど、お母さんの生き様も、いろんなものがあなたの中にあるんだろうなと思いながら、あなたが伝えたい。部落っていうものをよかったらその時何を伝えたかったのか。こんなことを伝えて、なかまとして繋がっていきたくてとそんなところを伝えてもらいたい。

報告者 同級生の話の中で、「出身はどこ。」と聞かれて、自分の出身地を伝えたが、「そうなんだ」と、そこが部落だという状況もわかっていないという状況だったので、部落差別を受けてきたという歴史があるところの出身だということを、まずは伝えたかった。何を伝えたいかと言ったら、まず、寝た子を起こす、起こしたいという気持ちで、言いたいということを先生に言ったという状況である。

熊本 自分が出身ですということではないと思う。そこには育てられたふるさとや、親の生きざまや、解放運動との出会いであったり、こんな素敵ところで、こんないい人たちがいっぱいいるよと、そんな部分も含めて伝えていくと思う。だから、何か伝える時に、分かってもらいたい大事なものを伝えていく。そういうものが石井さんにもあるんだろうと思う。随分前のことかもしれないけど、整理していくのもいいのかなと思った。

奈良 人権作文であるとか、自分の思いをという中で、そういう削られた発表になってしまったというのは残念だと感じた。だから、書き綴った内容をそれぞれがどう受け止め、部落差別だけでなく、自分の生活を守ることを、ともに考えていけることが大事だと思う。この立場で、地区懇にまわるけど、

各地域の中でいろんな形で啓発 DVD を使ったりとかいろんな話をする中で、痛烈に反対される。部落のことについても教えなくてもいいのではというのが出たりする。そういう部分の現実がある中で、ともに考えていく、正しいことを正しいと言えるということが大事ではないかなと思う。昨日、今日の話の中で出てきた、また報告者の話の中で出てきた中身が、当事者だけではなく、みんなの問題というものの捉え返しというのが、大事ではないかなと感じた。

熊本 高校で担任の先生が作文のことで、「出身ということ言わない方がいい、過激すぎる」と言った。言われた時の石井さんの感情とはどんな感情だったのか。タイトルの「寝た子を起こしたい。」誰に向けて寝た子なのか。石井さんのそのタイトル、あえてこれをタイトルにされてる。その思いを聞きたい。

報告者 まず、作文のことを言われた時は、自分が解放子ども会や高校生友の会の活動の中で、話を聞いたり、泊まり合い学習に参加したりして、おとなたちに言われたことと真逆のことを言われたという状況があって、正直、その高校時代の自分はどうしていいかもわからないようになっていたという状況であった。タイトルの「寝た子を起こしたい」ということへのこだわりは、本文の中の高校生や同級生、高校の教師に向けて、部落問題のことを知らなかった人たちに向けて、伝えることによって寝た子を起こせたんじゃないかという思いと、無知という状態が一番怖い状況だと思う。無知というのは、私が考えるには、寝た子の状態で、その人たちに向けて、その人たちを寝た状態から起こしていきたいという意味も含めてのタイトルである。

奈良 その「寝た子を起こしたい」は、どのように起こしたいのかというところを、お伺いしたい。

報告者 先ほど言われたように、無知の状態から、間違っただ話を聞くから、差別が続いていくわけである。「寝た子を起こしたい」については、どのように起こすかと言ったら、正しく起こすということ。例えば、差別することはいけないということからしたら間違いだが、差別をしている側の人は、何で差別をするのかはすごい大事だと思っている。理由が、親から聞いたから、じいちゃん、ばあちゃんがそう言ってたからと言うのであれば、その情報は間違ってるよというのを教えていくといい、というような起こし方をイメージしている。

愛媛 先ほど先生方が、部落差別について勉強をする機会がないというお話があったけど、学校教育と連帯をして、部落差別を含めてあらゆる差別について、先生から変わっていかないとなくならない。先生はその思いを勉強して、スキルアップをして、誰でも、いつでも堂々と話して、子どもに分かりやすく熱い思いを持って教壇に立つことによって、生徒は先生の言うことを聞く。先生たちには、帰ったら学校教育の場で熱い思いで語ってほしいと思う。

Ⅲ 総括討論

熊本 私は、教員として「差別はいけない」ということで、自分も差別はいけない、しないと思い込んで人権同和教育をやってきた。解放子ども会や解放運動されている人たち」と出会った時に、私は自分を変えられた。その時に、今は 50～60 代になっておられる方々が、自分が中学校の時に、教室の中で出身宣言をした。しかし、子どもも教師も、「だから自分たちはどうだ」という返しがなかったから、ぜひ受け止めることができる子どもを育ててほしいという願いを託された。その中で、私が勤務していた小学校では 4 年生で、4 年生集会の中で、自分なぜ解放子ども会の学習会に行っているのか、その訳を話す時に、家族、お父さんもしくはお母さんの部落差別に対する怒りや、事実を、具体的に訴えていく。4 年生のみんなの前に出した時に、「それっておかしい、それって変えていかないといけないのは僕たちだ」ということを返していく。当事者というのは、私たちみんなというのが納得いきました。石井さんが立ち上がられる姿を見て、元々持っておられる、怒りとか、おかしいぞという感覚とか、その家族が経験されている自信とか、誇りなど、引き出したり、それに学ばせてもらう周りがあったり、そして、周りが変わっていく場面がこれからあるんだろうなと期待して、渦を巻き起こすスタートを、石井さんに感じた。

熊本 石井さんの話を聞いて、あの子もそうだったよなという青年の話をしたいと思う。彼が小学校 3 年生の時、私の教室で差別、子ども同士の差別発言があって、私は自分のクラスで一緒に給食を食べていた 3 年生の女の子が、「それって 私のことも言ってるの。お隣のクラスの誰々ちゃんのことも言ってるの。誰々ちゃんのことも言ってるの。」と言って、発言した子どもに問うていった。その後、私はどうしていいかわからなかった。そうしたら、学習会の中で、子どもたちがことのいきさつを話し合っていて、そして、そこにムラのお母ちゃんがいて、私は、差別発言があった私の教室で、という頭になっていた。でも、お母さんは、丁寧に、「相手の子は、どうして、それを言ったんだろうね」と何回も学習会を繰り返す中で、昼休みになると、あの頃、子ども会の 5、6 人の子どもたちが、その子に話を聞いた。子どもたちが何回目か、随分長い時間かかってたどり着いたのは、実は、その子がそのムラの上級生とサッカーをしていた時に、「下手くそが」、「ばかが」などという言葉で傷ついていて、そのことを別の場面でもどこか恨んどるという発言に出てきたということだった。その子がもう 40 歳になって、先生たちを集めて、二次会っていうのをつくって、自分のこと、先生たちのこと、先生の悩み、俺の悩み、子どもたちの悩みを出し合う活動をしている。きっとあの子も石井さんみたいだったと思う。差別はたくさんあったけど、自分たちがムラの中で大事に育てられたという自覚があるので、今、たった一人で学習会の二次会を仕事の終わった後にやってい

る。だから、この先の石井さんの姿が重なって、私は教えてもらった。その子が先生たちに話をするのは、子どもたちをこの子は差別した側、この子は差別された側って分けないでほしい。そうじゃなくて、一緒に話していけば、自分たちがしてきたことを、話してって本当のことがわかれば、差別をなくすなかまになれるということを私たちに言い続けている。

熊本 今日、齋藤先生が報告されたばあちゃんがそんな話をされた。「名前が書けない。選挙権もあるんだけど、選挙にも行けない。」暮らしに直結するものだ。つまり、目の前の子どもたちにただ勉強しろ、というわけにはいかない。何のために勉強するのか、そんなところを一緒に考えていくきっかけになった。文字を奪い返していくばあちゃんたちの姿に出会ったとき、雨の日も、風の日も、手押し車でこられる。学びたい一心で。でも、その学びたい一心の中で、お茶を飲みながら話す時間があるんですね。そこで、齋藤先生がつくる空間が、私も居心地よかった。識字学級は、ばあちゃんたちにとってとても心地よい居場所であった。

愛媛 大阪の方の発言で、言われて嬉しかったことに対する回答で、高校生の時に全国高校生集会に参加するのに授業の公欠を入れないといけなくて、その紙を教科担当の先生に持っていく。判子をもらいにいったとき、一人の先生が「これ何、私、知らないから教えてほしい。」と言ってくれた。その「教えて」と言ってくれることが嬉しいので、現場に戻った先生たちも、その子ども会など参加してる生徒がいたら言ってほしい。

熊本 私たちには、部落差別、そして外国人への差別と二重の差別があった。でも、どうやって乗り越えたらいいか、人権教育の研修があるので、何でも私は参加していた。最初は部落差別のことは、全くわからなかった。何で、私ここに住んでいるのかなと思っていた。旦那に聞いても答えてもらえなかった。息子が小学校1年生のときに、いじめられた。相談もできずに、私は泣くだけであった。差別をすることがおかしいと思う。正しいことをしていれば何も恥ずかしいことない。私は、そのことが勉強になった。役場の人たち、先生たち、周りのみんなのサポートがあり、私、ずっと学ぶことができています。勉強することは大事。私の子どもも「あなたのお母さん、外国人、フィリピン人でしょ。」と言われ、辛くしていた。でも、私はまず子ども自身が変わらないといけなそうと思ひ、勉強より自分の気持ちを発表できるように頑張ってほしいと思ひ、おかげで子どもたちも成長したと思ひた。

大阪 「差別する側が出てきた研修はないよな」という話があったと思うが、僕もそれを考えていて、「確かにないな、何でだろう」というのを考えていた。果たして、差別したくて差別している人がどれだけいるのかというのを考えた。人権主任の先生が「出身を言うと、後で困ることになるかもしれない」という言葉は、別に石井を貶めたいと思ひてい

るわけではないと。その先生に言ったことについては。そういう悪意のない差別というか、気づかない上の差別というのは、ちょっと多いのかな、大半を占めるのかなと僕は思っている。そういう意味で、差別の現実は、みんなの心の中にあるのだけれども、何ができるかという、自分の差別性に気づいた取組をしていかないといけないことがまず一つである。今日の話聞かせてもらっている中で、何より人との繋がりが大事であること、これがキーワードになるのかなと思ひた。

熊本 就学前のことを昨日啓発しなければいけないと思ひてきたので、少しだけその保育園でしていることを言わせていただきたい。昨日から「中心に据える」という言葉があった。「中心に据える」というのは、そのクラスの中で一番きつ子子どものそばから離れないということ。その子のくらしを見て、その子がどうしてそんな姿を出すのかをしっかりと見る。そのことを子どもたちと共有して、一緒にクラスをつくっていくということで、決して特別扱いをするのではなく、その子とその子を取り巻く仲間をどう作っていくか、自分たちがどこに立っているかを見るために「中心に据える」という言葉だと思ひう。

愛媛 10年前にうちで識字学級やっていたから、うちの識字学級について伝えようと思ひう。宇和島市の識字学級の特色は、学習の重点が文字の読み書きの力を養うことのみではなく、差別に立ち向かう勇気や元気を身につけることに置かれていること、学級に定期的に保育園児や高校生が通って、学級生と一緒に机を並べて学習していることである。特に園児と学級生との交流を深めた意図は、部落問題とのプラスの出会いを子どもたちにさせたいということになった。この交流は、平成11年から市内の高校の生徒の人権委員と先生たちと識字学級がずっとやっている。だから、識字学級の生徒の生活の在り様や、各高校の人権委員会があるが、この中で、高校生が識字学級で勉強して、高校生がその地域の福祉会館で発表する。それには市民も来るし、いろんな人が来て、広げて繋げているのが宇和島市の識字学級の特徴である。

熊本 菊陽の識字学級というのは、解放子ども会とも交流をしていた。ただ、高齢のおばあちゃんたちなので、どうしても時間が合わなく、ある時、無理してちょっと早い時間に、手押し車を押して来てもらって子どもたちと交流したことがある。それから、他支部との交流があるが、他支部と識字の交流会を毎年やっていて、コロナ禍になってからは途絶えててできていないが、その識字学級と交流を重ねてきた。ただ、他の支部で菊陽がやっているような、文字を一から獲得したいというような勉強をされているところは少ないが、カラオケをしたり、楽しく交流して、仲良く過ごすことができたと思ひている。

熊本 前書記長が言った言葉の補足で、「差別も何もよかけん、とにかく子ども可愛がってはいよ」と

いうところから、スタートをしている。昨日、村田先生からあった「中心に据える」ということで、うちの子はムラの子でこれまでずっと中心に据えてきて、授業など取り組んできた。その中心に据えたこの子から周りを、暮らしの中を見ていく。そして授業に取り組んでいく。そのことで厳しい状況に置かれていた子どもたちが元気になっていく。うちの子たちを見ていて、そう感じてきた。決してムラの子だけではなく、元気が出るのは、その周りの厳しい状況に置かれていた子たちが立ち上がっていく、そんなクラスづくりであると思っている。部落差別は教育によって始まり、教育が終わると私たち思っている。ぜひ、期待をしているので、差別をなくす子どもたちを育ててほしいと思う。

大分 差別は部落の外で起こっていると思う。聞いた話とかで、わけのわからないような噂を事実かのように語る人がいる。そのときに自分がどうするかというと、若い頃は言い返せなかったし、自分が知識を持っていても言うことができなかった。ただ、こういう研修に参加すると、具体的な事実を持って説明ができる自分がだんだんとできてきて、その時に「本当にそうだ。」ということから始まって話ができるようにだんだんとなってきている。だから、自分が動かないといけないということがわかった。

熊本 高校は、学校がもっと良くなるとても大事な素晴らしいチャンスを手放した。それはどういうことかということ、寝た子を間違った考えで、部落をマイナスにして起こされていたということ。その時に石井さんの思いに、真摯に関わって行動していたら、先生や生徒たちが正しく起こされるチャンスだったと思う。学校関係者がだいたい参加していると思うので、石井さんが自分の学校の生徒だったらということを考えて、体制づくりをお願いしたい。

高知 私の地元の中学校の卒業生、高校に入学した子どもたちのエピソードが一つ、この子の発表したレポートに出てきたバーベキュー、解放子ども会の開校式の時に、保小中の子どもや、地域と学校の先生、保育士たちでバーベキューをする。そのことを伝えたかったけど、その地域でバーベキューをしていることを、どうしても子ども会、友の会に入っていたこの子の後輩は言えなかった。そこで言ってくれたのは、地域の子ども会には来ていないが、卒業した同級生、同じ中学校で学んだその子が、代わりに「地域のバーベキューのそういう催し物があるわよ」という話をしてくれた。だから、その学びは、地域の子どもとかどうかではなく、そこで何を大事にして、どこに目線を合わせながら自分が寄り添っていくかを学びに落とし込んだ時に、そういう子どもたち、おとなたちが生まれて、成長して、次の世代へつなげていってくれるんじゃないかなと思っている。学びは大事だし、今回、いろんな学びの中で受け止める心と、問われているのは自分だとすごく感じた。

協力者(三重) 二日間の四本のレポート報告をもとに、討議を進めていった中で、次の四点を確認し、まとめとした。

一点目は、「つながる」をキーワードに「ともに一緒に過ごす」「一人ひとりを大切にする」「誰一人として取り残さない」「相手を知り、受け入れる」ことは、具体的にどういうことかを確認した。

二点目は、私たちが属している組織、団体、活動、まちなど、その場所やつながりがどのような場所やつながりでないといけないか、その場所をどうつくっていくかを確認した。

三点目は、「同和保育所が建った意味をもう一度ふり返り、立ち止まらなくてはならない」「学校・教育システムを、今一度、問い直す時期、考え直す時期に来ているのではないか」「不登校になった原因が学校にあるなら学校が変わらなくてはならない。」という言葉が提起してくれているとおり、「今日も机にあの子がいない」と差別の現実からスタートし、同和教育や部落解放運動が築き、重ねてきた取組を広げていく中で、何を大切にし、継承していかなくてはならないかを確認した。

四点目は、会場から届けていただいた声をもとに確認すると行うとともに、報告者や会場から届けていただいた「子どもたちや親の願いから差別の現実に気づかされたからこそ、そこに思いを馳せられる自分であるかどうか。部落差別では被差別に置かれていても、他の人権問題では加差別の側にいる自分、差別は何らかの理由をつけてする側の問題だからこそ、自分がどこに立って差別の問題を見るのか、自分のあり様を問うていくこと、そんな自分と向き合えるかどうか、アップデートできる学び続けられる自分であるかどうか」「差別をする側、される側ではなく、ここにいる一人ひとり学んでいかなくてはならない。差別を許さない、なくす当事者である」「学び、知る機会がなかった。無意識に差別に加担し、放置してきた自分に気づいた。だから学び続けたい。その場を広げていきたい」と会場から重ねていただいたように、「自分が育てられたこと、気づかされたこと、嬉しかったこと、そんな学んだことを子どもたちやまわりにどう伝えていくのか」「どんな自分として立っていくのか」という声の意味を確認した。

IV まとめ